

EU統合から新しい文化の創造へ 現地レポート



ローマ発

EU統合がもたらした生活の変化

さとうあずみ
ローマ日本文化会館
佐藤杏美

EUの文化政策としては「Cultura 2000」という、文化遺産、文学翻訳、パフォーミング

アーツ、ビジュアルアーツなどの文化活動を資金面から支援するプログラムがある。イタリア独自の文化政策というと特に目立つものはないが、この「Cultura 2000」のプログラムには、多くのイタリアの芸術家やアーティストグループ、研究者などが積極的に参加しているようであり、他のヨーロッパ諸国のアーティストや研究者と共に

同で行なうプロジェクトも多く見受けられる。

しかしながら、ヨーロッパの文化的統合を考える際に、ヨーロッパ諸国はそれぞれに長い歴史があり、自国の言語、文化、生活習慣を大切にしているということを忘れてはならないだろう。イタリアも特に自国の文化とイタリア人であることに非常に高い誇りを持つ国であるが、それでも、イタリアとして統一されてからまだ130年ほどしか経っておらず、ローマ人、ナ

ポリ人、ミラノ人といった地方ごとの特徴が非常に強く残っているし、またそれを多くの人が強く望んでいる。

手づくりのジェラート

イタリアに、「古い道を捨てて新しい道を選ぶものは、去る道は知っているが、これから見つける道がどういうものなのかは知らない」という諺がある。「だからよく知らない新しいものより、少し悪くても古い習慣に固執するほうがいい」と解釈

されることが多く、イタリア人が非常に保守的であることがわかる。このような背景があるからだろうか、イタリアにおけるEU統合の動きは、逆に、自国の文化を保護、尊重するという動きを強めているように感じられる。

たとえば最近では、ジェラートと呼ばれるイタリアンアイスクリームの職人連盟が、工場的大量生産品と区別し、偽のジェラートが出回らないように、「手づくりのジェラート商標」

さとう あずみ ●2000年、慶應義塾大学総合政策学部卒業。IT関連企業にて勤務後、イタリア・シエナ外国人大学にてイタリア語を習得。2005年3月より運営専門員としてローマ日本文化会館にて勤務



を設け、ある一定の基準に従ってつくられたジェラートのみが手づくりジェラートと名乗れるようにしようとする動きもあった。また、ヨーロッパ全土においても、それまで各国で基準が設けられていたチーズやワインなどの伝統的食材を守るための食品の原産地保護法が2004年にヨーロッパ全域で統一され、「農産物及び食品の原産地保護法」として施行されている。

「スパゲッティを追い出そう」

さて、食品は特に各地方の特徴を表わすものであるが、それを示すおもしろいエピソードがある。私たち日本人が、海外で「寿司」だ「刺身」だと言われるように、イタリア人の代名詞として冷やかしに使われている言葉はやはり「スパゲッティ」である。昨年のサッカーの欧州選手権予選リーグでのデンマーク対スウェーデンの試合で、双方引き分けならデンマークとスウェーデンとがそろって決勝ト



DOP表示。ヨーロッパ全域で統一された「農産物及び食品の原産地保護法」に合致した製品であることを示す

ーナメントに進み、イタリアが予選落ちするとうとき、スタンドには「2対2にしてスパゲッティを追い出そう」というような内容の横断幕が数種類出ていた。

これらの横断幕は試合開始前に撤去されたのだが、結局、試合は2対2の引き分けに終わった。直後のサッカーファンへのインタビュやインターネット上のフォーラムでは、予選落ちしたことや、スパゲッティと馬鹿にされたこと、試合は引き分けるように裏工作されていたということが語られ続けたのだが、デンマークに対する代名詞はもちろん「バタークッキー」であった。

ユーロの導入で物価上昇へ

このような多様性を含むヨーロッパにおいて、少なくともイタリアでは「EU統合」というと通貨統合によるユーロの導入

がやはり一番に思い浮かぶ。ユーロを導入したほかの国に比べて、イタリアでの物価の上昇は比較的高く、リラからユーロに変わって、多くのイタリア人の生活は大きく変化した。つい先日「丸一日買物をする」という物価上昇に抵抗するストライキが行なわれたばかりである。政府はユーロ導入後の価格のコントロールをしっかりと行ない、決して値上がりはしてはいない、との一点張りであるが、商品の



ユーロ・リラ換算用の計算機。ユーロが導入されたときに、政府が各家庭に無償配布した
写真提供：筆者（右も同じ）

値段はほぼ倍に値上がりしている。ところが、給与については正確に計算されて、リラ時代と同じ額しか受け取れないため、ユーロの導入によって、イタリア人は自動的に全員貧乏人になってしまったという感が非常に強い。

この価格の変化は、イタリア人の生活習慣にも影響を与えていて、有名な長期バカンスさえもホテル代の高騰によって、短期に近場で簡単に済まされるか、行かない人が多くなった。今までは夏はローマのような大都市でも町から人がめっきり消え、商店も休んでいるところが多かったが、年々その空虚さが感じられなくなっているそうである。

このように、国内でさえも地域性が非常に強く、北部においてはユーロからの撤退、イタリアからの独立といった動きさえも出ているイタリアにおいて、ヨーロッパの統合が進むなか、今後どう変化し展開していくのか興味深いところである。